

試験研究成果普及情報

部門	漁場管理・生産基盤	対象	研究，行政
課題名：富津干潟周辺海域におけるアマモ類の分布			
[要約] 生物の生息場として重要といわれているアマモ場について，東京湾の富津干潟周辺海域で分布調査をおこなった。2014年におけるアマモ場の分布範囲は4km ² ，そのうちの群落面積は1.32km ² ，群落密度は33%と推定され，群落面積は増加傾向であった。本海域のアマモ場は水温や物理的な影響を受けて増減するが，今後も分布は継続すると考えられた。			
キーワード 東京湾，富津干潟，アマモ，水深，面積，水温			
実施機関名	主 査	水産総合研究センター	東京湾漁業研究所
	協力機関	国立研究開発法人 水産研究教育機構	瀬戸内海区水産研究所
実施期間	2009年度～2016年度		

[目的及び背景]

東京湾における生物の生息場として重要といわれているアマモ場について，継続した調査を行い，その必要性を検討することが求められていることから，東京湾最大のアマモ場がある富津干潟周辺海域において，アマモ類の分布状況を明らかにすることとした。

[成果内容]

- 1 東京湾の富津干潟周辺海域のアマモ場では，アマモ，タチアマモ，コアマモのアマモ類3種が分布し，分布範囲は4km²，そのうちの群落面積は1.32km²，群落密度は33%と推定された（図1，2）。
- 2 アマモ類は種類ごとに生息水深が異なり，アマモは水深0.6～3.8mに分布し，1.5～2.0mで多く出現した。タチアマモは1.2～5.1mに分布し，3.0～3.5mで多く出現した（図3）。
- 3 群落面積は1999～2001年に低位で推移した後は増加傾向にあり，1999，2008，2011年には顕著な減少が見られたが，2012年以降は連続して被度の増加が見られた（図4）。
- 4 夏季のアマモ場の水温が顕著に高く，高水温が長期間継続した2010年には群落面積が減少するなどの影響があると推察され，翌年の2011年にはアマモ群落の減少が見られた。しかし，翌年2012年の調査では被度が急速に増加しており，本海域のアマモ群落は短期間で再生することが示された
- 5 本海域のアマモ場は水温や物理的な影響を受けて増減するが，今後も分布は継続すると考えられた。

[留意事項] 東京湾の各地先によってアマモの分布，増減の状況は異なる。

[普及対象地域] 東京湾内湾海域 漁業関係者

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]



図1 アマモ類の確認地点とアマモ場推定範囲 (国土地理院電子地形図 25000)

○ : アマモ, × : タチアマモ, ▲ : アマモ類, 実線 : アマモ分布範囲, 点線 : タチアマモ分布範囲

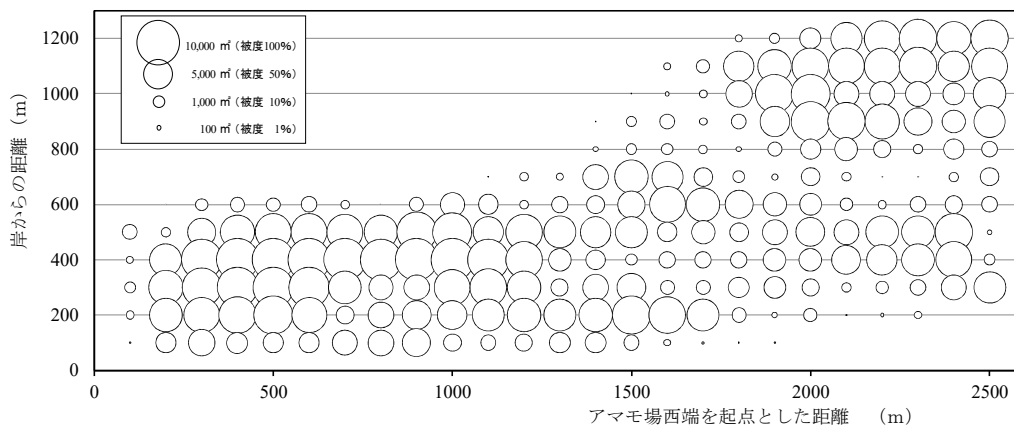


図2 アマモ群落の分布 (100mメッシュ毎のアマモ生育面積 : 2014年)

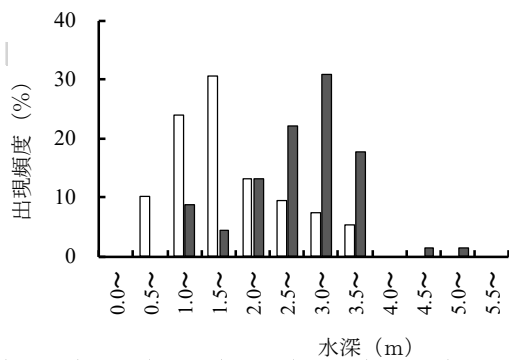


図3 アマモとタチアマモの水深別出現頻度

□ : アマモ, ■ : タチアマモ

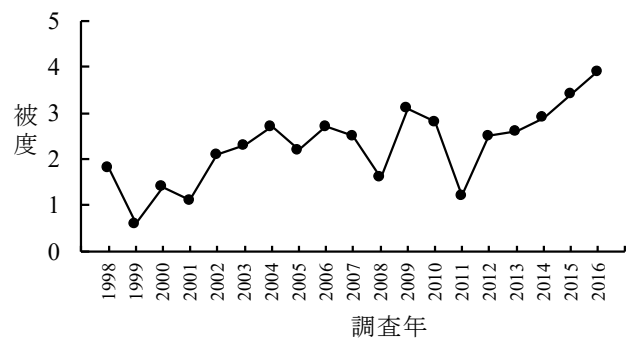


図4 アマモ被度の経年変化

(10地点平均)

[発表及び関連文献] 千葉県水産総合研究センター研究報告第12号(2018)掲載予定

[その他]

- ・平成21年度試験研究要望課題 (提起機関: 漁業資源課)
- ・本研究の一部は、農林水産技術会議委託プロジェクト研究により実施